

試験日 : 2024年9月7日
入試種別 : 大学院(修士課程)入学試験問題
学部・研究科 : 心理学研究科
科目名 : 専門科目

解答又は解答例

設問 I

1

タケルくんの行動にはオペラント条件づけが関与している。まず、タケルくんの「おもちゃを買ってほしい」といった言動は正の強化を受けなかったが、床に寝転んで大泣きする行動は、本来は望ましくない問題行動であるものの、母親が最終的におもちゃを買い与えることで正の強化を受けた。すなわち、「泣くとご褒美がもらえる」という経験が日常的に繰り返された結果、行動が維持・増大したと考えられる。一方で、母親のおもちゃを買い与える行動は、結果として周囲の視線やタケルくんの泣き叫びといった嫌悪刺激から逃れることができたことで負の強化を受け、維持されていると考えられる。このように、タケルくんの問題行動と母親の対応は相互に強化しあっているとと言える。改善には、母親への教育や支持をベースに、問題行動に対する一貫した消去手続きや望ましい行動への強化が有効である。前者は「泣いてもおもちゃを買い与えない」ことであり、後者は例えば「言語的な要求があったときにおもちゃを買い与える」ということである。もちろん、消去手続きを始めると問題行動が一時的に激しさを増す消去バーストも見られるので、その対応も考慮されねばならない。

2

ア：プレグナンツの原理とは、ゲシュタルト心理学における最も基本的な法則の一つであり、人間が本能的に、情報を最も理解しやすくまとまりのある状態で認識しようとする、知覚現象における傾向である。

イ：接近-回避型の葛藤とは、人の行動を「接近したい力」と「回避したい力」のバランスとして捉えたカート・レヴィンの葛藤理論の一部であり、ひとつの物事がプラスとマイナスの両面を持っている葛藤を指す。

設問Ⅱ

1. 精神分析；フロイトにより創始された心理の理解、心理療法論である。人間の心や行動を無意識概念の導入によって、合理的科学的に解明しようとしたものである。精神分析に関しては、心的外傷体験、抑圧、エディプス期、自由連装砲、転移、抵抗解釈といった基本的な用語が使用されて説明されていること

行動療法：パブロフによる学習心理学をベースとし、ワトソンのレスポナント条件付けによる恐怖への治療法やパニック障害や不潔強迫症へのフラッディング法、過食や喫煙に対する嫌悪条件付けなどがある。さらに、スキナーによるオペラント条件付けによる強化学習や社会技術訓練法やセルフコントロール法などについて説明されていること

クライエント中心療法：ロジャーズにより創始された人間論、治療論であり、人間の心には自己実現傾向があることを前提とし、基本的な潜在能力を最大限に発揮させようと努力する存在であると捉えている。治療においては、セラピストの基本的な態度として、無条件の積極的関心、共感的理解、自己一致（純粋性）を挙げている。

2. 求められる要因としては、心理療法における学派というものがあまりにも増えすぎており、またその学派間の対立も見られるが、現実のセラピーにおいては、単一の理論だけでは限界があり、またクライエントのニーズに合わせようとする、多様なアプローチを実践することが求められるようになっていること。

3.

- ・研究そのものがどのような目的、方法で行われるかが明確に説明されていること
 - ・研究への参加は、自由意志であり、いつでも中断することができること
 - ・協力者の個人情報保護が確保され、特定されることのないよう配慮がなされていること
 - ・個人情報を含むデータが適切に保管されており、終了後は適切に廃棄されること
 - ・研究実施中に、体調の不調等があれば、適切に対応する体制がとられていること
- などが明記されていること

設問Ⅲ

1. ① f ② b ③ g

2.

1) ストレンジ・シチュエーション法は、乳幼児の愛着行動を観察するために開発された実験手続きである。以下の8つの場面を順に設定し、乳幼児の反応を観察することで愛着のタイプを分類する。 1. 母親と子どもが部屋に入り、子どもが遊ぶ。 2. 見知らぬ人（ストレンジャー）が入室し、母子と3人で過ごす。 3. 母親が退室する。 4. 子どもと見知らぬ人が2人で過ごす。 5. 母親が再入室し、見知らぬ人が退室する。 6. 母親が再び退室し、子どもが1人で部屋に残る。 7. 見知らぬ人が再入室し、子どもと関わる。 8. 母親が再入室する。 この一連の場面において、子どもの探索行動、分離時の反応、再会時の反応を観察し、愛着のタイプを評価する。（文字数 298）

2) ① 回避 ② アンビバレント(両価) ③ 安定 ④ 無秩序・無方向

3.

カウンセラーがクライアントと職業的な関係以外の関係（私的・金銭的・恋愛関係など）を持つことを禁じる原則を指す。二重関係を避けることで、両者の中立性が保たれ信頼関係が損なわれることを防ぐことができる。（文字数 101）

設問IV

1.

セラピーにおいて、クライアントのフレーム（認知的な枠組み、関係の枠組み）にセラピストが合わせることをジョイニングと呼ぶが、セラピストがフレームを変える作業のことをリフレーミングと呼ぶ。クライアントが具体的な出来事や他者との相互作用に対してどのようなラベルを貼っているのかをクライアントに問うことがまずは必要である。リフレーミングの例として肯定的意味づけ、円環的質問、工夫や例外を問うといった方法がある。

2,

心理教育とは、家族を「問題の原因」とみなす家族病因論的な認識論の立場に立たず、家族システムに科学的・臨床的知識を体系的に導入する支援プロセスである。心理教育は、疾患モデルやストレス対処モデルに基づき、家族が自分たちの役割や限界を理解することで、状況に対する対処可能性を再構築することを目的とする。その際、家族が治療過程に主体的に参画し、相互支援的な関係性を形成できるよう調整さ

れ、これにより家族のエンパワメントが強化される。最終的には、知識獲得と意味づけの変容を通して、個人および家族全体の機能的適応と回復を促進する実践的アプローチである。

3.

ストレングスアセスメントとは、問題や欠点ではなく、個人や家族の強み・資源・潜在能力に焦点を当て、回復や対処行動を支える要因を体系的に見立てる評価方法である。

包括システムとは、ロールシャッハテストにおける反応の記録・採点・解釈手続を統一し、指標を標準化することで、検査の信頼性と妥当性を体系的に保証する評価的な仕組みである。

一般知的能力指標とは、発達検査において用いられる補助指標で、ワーキングメモリ（WMI）や処理速度（PSI）の影響を除外し、言語理解（VCI）と視空間（VSI）の純粋な認知能力を評価するものである。

治療的アセスメントとは、心理検査を単なる検査ではなく、来談者が自己理解を深め、変化への動機づけや新たな対処方法を獲得することを目的として行う、評価と介入を統合したアセスメントの枠組みである。